

平成24年度菖蒲池古墳範囲確認調査 現地説明会資料

1. 菖蒲池古墳について

菖蒲池古墳は、橿原市菖蒲町にある、7世紀中頃の方墳です。菖蒲池古墳は丘陵の南斜面に造られています。菖蒲池古墳の周辺には植山古墳、五条野宮ヶ原1・2号墳といった方墳があり、これらの古墳は菖蒲池古墳と同じ丘陵上に造られています。

菖蒲池古墳の調査は平成21年度に始まり、墳丘については多くの点が明らかになりました。これを踏まえ今年度は、墳丘の北東角及び東側に調査区を設け、墳丘規模の確定と墓域の確認を目指しました。

2. これまでの調査で明らかになった菖蒲池古墳の姿

規模と形状・・・東西約30mで2段の方墳。

古墳の外見・・・墳丘裾と墳丘上段裾に1段の基底石がめぐる。古墳の前面には礫敷、掘割底には砂利敷がある。墳丘斜面に貼石は認められない。

つくりかた・・・版築（質の異なる土をおき、突き棒で突き固めながら盛土をする技法）や土のう積みを用いる。

その他・・・古墳の南西角が地震によってくずれている。（いつの地震かは不明）

3. 平成24年度調査の成果について

墳丘の北東角及び掘割底を検出したほか、東掘割の外側で版築状の盛土や石敷を検出しました。また、古墳築造後に建てられた掘立柱建物を検出しました。墳丘北東角は非常に良好に残存し、1段の基底石が直角に折れる形状です。この形状は平成22年度調査で検出した南西角と同じです。掘割底は非常にせまく、礫敷が認められない点が墳丘北東角での特徴です。東掘割の外側で検出した版築状の盛土や石敷は今回、初めて確認されました。石敷は版築状の盛土をして造り出したテラス面に敷設されています。掘立柱建物は東西15m（5間）、南北9m（4間）以上で、柱間は3m（10尺）もある大型の建物ですが、その用途はわかりません。

4. まとめ

このように、今年度の調査では、菖蒲池古墳が、平面形が一辺約30mの方墳であることが明らかとなりました。また、掘割の外側にも盛土や石敷を伴う遺構があったことが明らかとなりました。盛土や石敷は、古墳に関連する遺構と考えられ、古墳の東外堤である可能性もあります。この場合、墓域の東西幅は、古墳に関連する遺構を検出した範囲では東西約58mを測ります。

また、菖蒲池古墳でみられる版築や石敷といった土木技術は、飛鳥時代には宮殿や寺院、庭園といった、きわめて限られた遺跡でしか検出されません。菖蒲池古墳では、これらの当時の最高水準の土木技術が使われているので、古墳の被葬者を考えるうえでも今回の調査成果は重要です。

その一方で、古墳築造後に建てられた掘立柱建物の用途や、古墳周辺の遺構のあり方など、新たに解決すべき点も明らかとなりました。これらの点については今後の課題といえるでしょう。



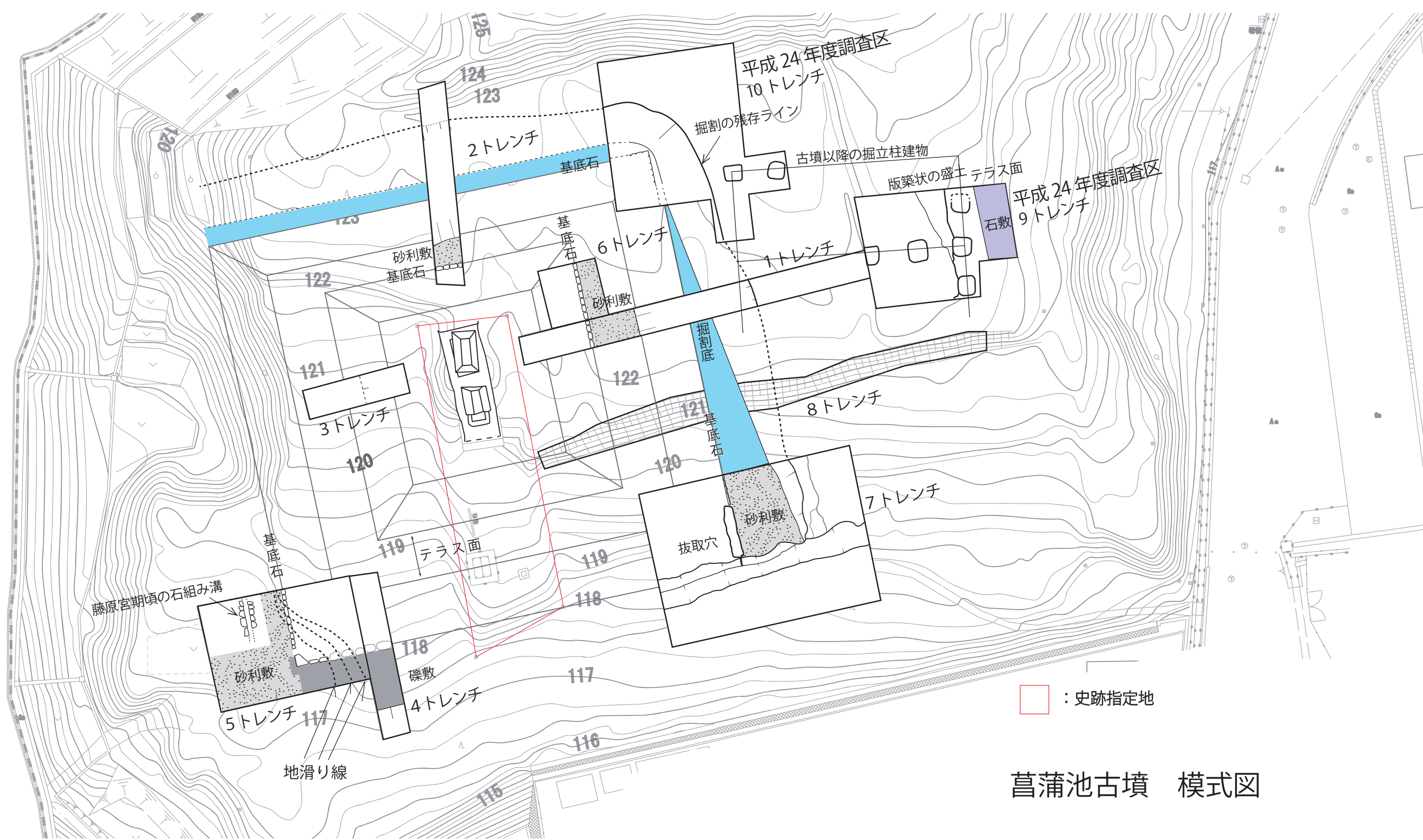
墳丘北東角（北東から）



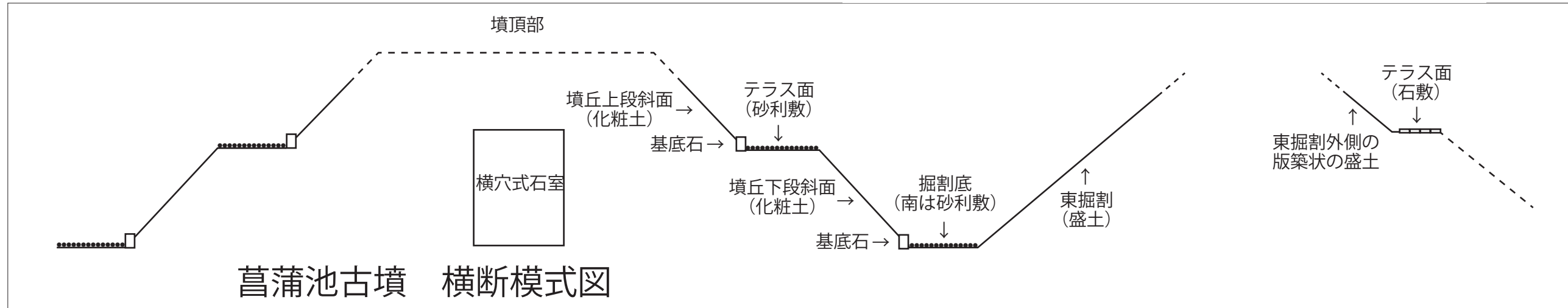
掘立柱建物と東掘割外側テラス面の石敷（東から）



東掘割外側テラス面の石敷（東から）



菖蒲池古墳 模式図



菖蒲池古墳 横断模式図